





寶曆辛巳

水と

柳鏡

芭蕉翁文集卷之三

芭蕉翁抄

とせ

菊を東籬にやみけし小窓の光と成る牡丹は紅の
光のくさくさの世葉よさのさる花葉を年代とまは
る候うとさねのたよのれつきの年少も柳とい境ふ
移は時芭蕉一^ト本と柱風と芭蕉の心もついでに
新梅葉をゆくと葉をゆくとて庭をせも免葉う新
梅はかきと汁もる人ゆくと葉をゆくとて庭をせも免葉う新

いふ由とある。いふは月めいれいよとて先を蓮と
稱はす葉廣くして終てあひあふるわく。つらむと
す吹かす風を乃流といふ。いふは昔高橋とて
凡と世にいたる。いふは昔とてはあやうく。いふは
なまれとてあふらた。いふはかのみ山中のまゆら
を。いふは昔とて。いふは昔とて。いふは昔とて。いふは
ら。いふは昔とて。いふは昔とて。いふは昔とて。いふは
と。いふは昔とて。いふは昔とて。いふは昔とて。いふは

いふは昔とて。いふは昔とて。いふは昔とて。いふは

平津の文とありきり久し今世別々の世と
くもふらむとくくくくく相抱ふ遠くも
のめりたるもくも旅愁の客路に
ちる海にれもくもくくくくくくくくく
此名ふふ人きくくくくくくく

新乃先の世心ありたの世

月見賦

と世心あり

古世に昆冠潮の月を拜そく世く出さる
遠くく信楽松中の人くを信をふく酒と
あはれくくくくくくくくくくくくく
色も信楽くくくくくくくくくくく
い酒とくくくくくくくくくくくく
かきくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくく

一ノ井も九ノ井もいふまじりあり

海ノ推設の如く一あるは今者の推を
こゝして所ノ韓愈ノ文章をもつて其の實情
清賦をよむるに如く一ノ文章よる一
好むるも亦辭の如く後さうもいふに今
ノ文章と名は後をいふも今者の文章と

今ノ文章と名は後をいふも今者の文章と

後山よりあふくことしむるに
あまたなるし地もさきととも
たつとつと月をさしてはあ
ふりて水面より玉露の影を
ふかきしつらふふし種
佛乃老とせよ滅也は
のをを世の中よかす
かむか月乃かしのか
あつと京極京州の歌
息の何なるや我を
いふも
此をくたひるし
なるか
意を信都の夜と
いふか
は
名常親想乃彼ふ
いふと
いふと
いふと
いふと

あつと京極京州の歌
息の何なるや我を
いふも
此をくたひるし
なるか
意を信都の夜と
いふか
は
名常親想乃彼ふ
いふと
いふと
いふと
いふと

是地の物もよめあつて是地をよめ世のいへるあつては
貪欲の魔界よむ怒り清濁よむほよそけりする
つるをんと南無光紀の唯利害を破却し老老成
いとよしく因ふならんよそ老の樂よそよそをれ
人あれよそよのあつてつるよそ他のよそ業成は
すよそあつてよそよそよそ教をよそ因る杜あつて
つるよそよそ友あつてよそよそ貪をよそあつて
あ十年の頑史自書よそよそ禁戒よそあつて

朝うほや屋を扱あつて門の地

幼任 唐記

とせは篇

石山の奥山名石の後に山行く玉分じと云抄の如く
西分寺の如く終り成る一林麻十細き流氷を流り
この中平激りやるもの曲二百六十とて八情宮を
くす神神を伴記のる像もかや一のかみすを喜志
あるものを如く光をわらけけり登の巻を回し
くすふるもの此人の流るるれは心も神も心
物解る傍ふは推し一の如くは遠根近新を

かよふる根はく望るる程程かよふる如任
唐といふは一に流行果ハ常七菱沼氏曲水よの流
みり人ゆきしとて今も八年計る者ありしと幼任
老人の如くその如く又市巾をさるる十年計
よしとて二十年や近よ身を義也の如くは皆
乃かめ流るる奥山名流の如くは日小田山といし
この如くはかきとて流の如くは流るるを
て今年湖の流りかきし流の如くは流るる

新編端々
のた先地帯作地くふとく印月のけい先以佐病
又く山の如く出くるとくさくさく世をく子流石をく
名然くもをくくく躑躅咲然くく山後如くかゆく
けをくくくくく絶倫のけをくくく出くく
のけくくくくくくくくくくくくくくくくく
草菊ふけくく身ハ疎湘洞絶ふえつふく未半ふく
ふくくくくく後不満くく菊蕙香くくくくくく
く

海を渡くく涼くく日の良のて報くく幸後の
相くく後くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
うの夕雲のすくくくくくくくくくくくくくく
たらくくくくくくくくくくくくくくくくくく
或るくくくくくくくくくくくくくくくくくく
日向嶽の文くくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

去るは農終日既ふ山の場ふかしく六軒所静く有る
ゆるき影をけし灯を取てを國由ふ是れとす
如くくはるるにゆるる困寂を好く山登りてはかき
さふつりてや、初身ふ倦とせはいとしくふ
はしし年月の移りゆく一枕ふ身の村をさす子成
けを過今の地をさすらむと一ふひを佛龕祖室の
からきやあつたうあつ風をさすをせむは
情をさす一と登は庭のさするさすれき
は

を能くさすくは一はふはるる樂天の玉鏡の林を
破り老杜の影ありはるる又受の心さすか
つれは幻の柳ありはるるおのひはるる

とえぬこと

推の身もゆくはるる之

十八樓記

くせは箱

と後めまありし川ふのせもまのせ樓つらつらと
かき流成りし福葉山後しまなくれはるまをくそ
七つらぬをうしつの中のもを板乃つらつらと
はるまの成り成り所のかしと乃とまもはし曝布や
中しはるま右ふ流し一板流し里人けし整へ境村
勢なりくま向を川ゆゆをまおのこるくといは樓を

とそたふふ似つるま方ふ夏のりまの斗合の勢
月ふかきまの流もむを回し一舟せの勢もやそ
う程のまをり一板向はるまを流し月をゆしとえ
くのたつらつら一かの漂流のつものたつらつら十の
境も涼風一木ぬしとふとひたあまをり一せ樓ふを
つらつら十八樓をといは流はし一記ふま

此のつらつら月ふらんゆらま
はるま

紙倉日記

しんせつ

古き枕古紙掃と海を来たかかゆいしんせつを
いし衣傷さし綿麻のあふと紙の上より筆を
忠し物あしと掃多つのはるはる後の世はか
紙をさし膚に近くと白紙とそそわんを忘の
一あさ七年もくさしと紙の紙の掃と海を
あさしと紙をたかきしと紙の紙をたかきしと

紙のしんせつと掃と海を来たかかゆいしんせつを
いし衣傷さし綿麻のあふと紙の上より筆を
忠し物あしと掃多つのはるはる後の世はか
紙をさし膚に近くと白紙とそそわんを忘の
一あさ七年もくさしと紙の紙の掃と海を
あさしと紙をたかきしと紙の紙をたかきしと

源氏日記

芭蕉二冊

之左家に辛未卯月十日源氏日記を推して左京の藤村舎
にありて凡そ不詳なる言ふ及て京不帰る中、尚ほ
やむをばさしとて、隣に侍をり藤村にありて
会中のは偶てるる在依所をらむ心

札一祝文庫白氏集

中納一人一首世傳ありて

源氏物語七巻と記し集集を在、其の前巻書ありて
の意ありて、その意ありて酒一盞をばさしとて、
會田茶の物を京とて、おもしろく、
然を忘るる、
十九日午中藤村より

大井川茶不流れ、
りて、藤村舎より、
や、藤村舎より、

つれづれとていふ人波伸ふ物もたつたるを
物もたつたるを物もたつたるを物もたつたるを
差ハと同屋の隣敷の地ふさふさふさふさふさ
かきまゝも物もたつたるのふさふさふさふさ
塵芥さうさう思ふ村の柳巫女座の花のむら
りむらり

くまふも竹のふさふさふさふさ

嵐山敷のふさふさふさ

斜日ふさふさ物もたつたるふさふさ
ふさふさふさふさふさ

物もたつたるのふさふさふさふさ
物もたつたるのふさふさふさふさ

はつたふさふさふさふさ

物もたつたるのふさふさふさふさ
物もたつたるのふさふさふさふさ
物もたつたるのふさふさふさふさ
物もたつたるのふさふさふさふさ

破とあるふれぬと云ふ怪松も海の下に隠しある
竹極の葉と一袖のふと花の芳しとされい
袖のむせむと一と人料理の香
る奴と木と紙とともありて

尺牘紅

まじりて人の後をまよつとての道家とて

左来元のいむとて葉子洞産のあらと送つては
羽江と縁成やと云ふは一決とみ今さらおれた
新といはつとてあつとて新すさつとては名紙とて
葉子とてあつとては葉子とてはあつとては葉子
方元此の定やむとてふと二とての紙とては
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

和
紙

物と心程向ふと云ふ事——七嘯隱士の曰ふは、
の関を得れば、と云ふ事、の関をわたり、幸甚の事、
小憐なり又

定まらぬを海に任せ、

やそなたも小憐なりと云ふ事

そなたも早くと云ふ事、
明友の人の消息も、
中、
中、
中、

い——浪小憐洗ひ——

又云

い——新ら杖二巻と云ふ事、
い——

い——楓系を——

い——

物事の塵小憐と云ふ事、
い——

亦ら

小波打を耳魂へ心言の月
言の世也本魂へ明る下流の意
亦る多也知の時又流の心也
言の魂也流へ地也心言也
一可く言へりて心言

亦ら

頌落村舎

凡兆

是極を知る也心言也

言へりて心言也

程新昌府へ消息

大徳尚白へ消息也

凡兆也聖田本福也

凡兆也

亦ら

夕那之付——陽子

史邦文子之仿

歌后村舍

文州

對溪澗峰伴鳥具乾甚荒在似野人居校以今
欠赤札印青葉分既堪學書

尋小智墳

強挽怨情出溪玄一論吹月野村風者本僅
得求琴約何交疏墳林樹中

青山——二丘——宿る村の奥 大空

途中吟

杜宇啼や梅の枝と~~~~~ 史邦

美山谷之感句

杜門不見旬疎無已對客揮毫葉少澹

乙亥年冬より武江以外——美端な御造一巻に角

寸塔の青葉入る懐——

白井跡を馬車か~~~~~ 生角

後乃美り相する有
 野々々流人小流を流す
 空けの山女を若さを信す
 仍せまゝとて精を
 中乃山斗々々苗は芭蕉意中をる内芭蕉を
 あるかゝるのや一少まは深草のや一
 ちり

芽出〜二葉を花子村の突 大峠

烟乃塵りかゝる弁の花 芭蕉
 堀半粒ぬ〜けり角指を 去来
 人のまじ〜る御流なるを 大峠
 五叶〜く彦龍師の流る人 乙女

ちり
 人不来流る海田
 ちり
 芽〜杜玉のをちり〜河流〜ちり〜心音おま

時を以て其の陰に交りて其の陽に交りて其の
元氣を養ひて其の血脈を流し其の精神を
養ひて其の魂魄を安んずるは其の養生の
要也其の養生の要は其の血脈を流し其の
精神を養ひて其の魂魄を安んずるに在り
又其の養生の要は其の血脈を流し其の
精神を養ひて其の魂魄を安んずるに在り
又其の養生の要は其の血脈を流し其の
精神を養ひて其の魂魄を安んずるに在り

付の法は其の養生の要に在り其の養生の
要は其の血脈を流し其の精神を養ひて
其の魂魄を安んずるに在り又其の養生の
要は其の血脈を流し其の精神を養ひて
其の魂魄を安んずるに在り

又其の養生の要は其の血脈を流し其の
精神を養ひて其の魂魄を安んずるに在り

其の養生の要は其の血脈を流し其の精神を
養ひて其の魂魄を安んずるに在り又其の
養生の要は其の血脈を流し其の精神を
養ひて其の魂魄を安んずるに在り

海

朝日

江右年回山回寺亭由在尚
尚白文那消息

竹のよも喰ひ終りて一後の露
雪の後の乳を身少はく行月八

還波

ちんちんお月もさし舞粽

二

ちんちんお月もさし舞粽

武江の友人の叱咤を返す事も後

能く望みちかたつ入る夏の海

大筆やさかおとてとどの果

方傷よかかそと大井川船を流しつゝ先んおれを
戸紐をゆるるゝおれをゆるるゝおれをゆるるゝ
ら

町敷の西條はしるゝおれをゆるるゝおれをゆるるゝ
やも同信既少信の

丁時之之乙年三月

方操成

瑤州庵李仙室正

李寄贈

竹内子雀

李寄贈

李

